

『川僧講人天眼目抄』 象徴詞覚書

古 田 雅 憲

抄物の象徴詞については既に多くのことがらが語られた。それらに付け加えるべき言葉は必ずしも多くないが、ここに川僧講人天眼目抄のそれについて一覽しておくことは全くの無駄ではないと考える。それは聞書作者（聴講者）・講者の聞書に対する関わり方と、象徴詞の語としての特性がどのように相関するののかという視点においてのことである。実際の作業に即していえば、「同一講義／別人聞書」という人天眼目抄二種聞書を象徴詞にこだわりつつ対照してみようというわけである。

そのような作業を進めるにつれて次のような四つのケースがあると知れる。

- ①両聞書で対応する注釈文脈の中に、同一の象徴詞が見出される場合。
- ②両聞書で対応する注釈文脈の中に、別個の（類似の）象徴詞が見出される場合。

③両聞書間に対応する類似の注釈文脈は存在しても、いずれか一方にしか象徴詞の見出せぬ場合。

④両聞書間で注釈の文脈自体が異り、結果、いずれか一方にしか象徴詞の見出せぬ場合。

それぞれに実例を示せば次のとおり。

①の場合――

▲帯春温ト云ハ和氣ノトトシタヤウタソ（史659）

▲帯春温ト云宮中ノ春如クノドトシタ様タソ（足150松198）

▽霜重風モハケシク木々ノ梢モバラリトシテ（史322）

▽霜モアリ風モハゲシウテハラリト落尽シテ（足68松136）

②の場合――

▲体明無尽ヨキリリキリリトスル処テミヨ（史302）

▲チツトモスキモナククルリクルリト推シ巡テ无尽无窮ナソ（足62松130）

▽活眼ヲ開タラハ桶ノ底ハツウントヌケウスソ (史200)

▽若活眼ヲ開テ見ハ桶ノ底ハツツト脱ウズヨ (足欠、松69)

③の場合――

▲月皎天心雲霧収ルキカトシタトヲシナル道ウマテモナイ
ソ (史498)

▲月皎天心雲霧収寂然トシテ擬テ正念タル時寂然分明ナソ
(足95 松159)

▽師曰世尊ノ処ハキラリトシタソ (史136)

▽世尊良久チツトモ陰力カリモ无ヲサテコソ (足欠松48)

▲此剣ノ下タテ天下ハ悉静謐シタソ (史655)

▲斬天下平ゲテシカト静謐シタ程ニ (足148 松197)

④の場合――

▲問祖意教意へ中略> 語話シテ云纔日本ノ和歌ノ上ヘテタ
ニ二条殿ノ源氏ヲ談セラルルニへ中略> 二条殿ノ理ヲメ
ツタリメツタリトツケテヲシナルコンロン源氏ヲ読ミ失
ナウト云云拶云鶏寒へ中略> 代云使頭…… (史237)

▲祖意教意是――鶏寒――水如何領会代表云使頭…… (足10
松80)

▽如何是門裏句 四相排班立擬情望聖容 師云門裏 ツウ
ント入ルハ戸口四相排班シテ立ツドコノ事デ有ラウスソ
聖容ト云ハ誰テ有ウスソ望ト云ハ入口ハ戸口門裏ハソレ
ヨリ奥タソシタレトモマタ聖容ヲ望フタソアソコデカイ
添ハハ又聖容テワアルマイ (史612)

▽如何是門裏句四相排班立擬情望聖容 是レハキツカト門
裏ト見ヘタゾ聖容ト云ハ誰カ事テ在ソ門裏ナレトモキツ
カト聖容ニハ近ツキ得ヌソ 又シカト近ツカハ聖容テハ
在マジイソ (足134 松185)

以上のようなものを区別しつつ史料本、足利本系二本
(足利本、松ヶ岡本)に見出される象徴詞について一覽し
たものが別掲の表である。表は次のように見る。

*五十音順に並べる。史料本と足利本系に同一のものがあ
る場合には、史料本のものを先に示した。

*清濁の別は問わない。すなわちキカトとキガトは同じ項
に含めた。

*促音、撥音の有無あるものは別項として立てた。

*国金順子氏にならった型分類を付した。⁽¹⁾

*史料本のは「ヘシ」、足利本系のは、足利本が欠
巻、松ヶ岡本で補完した場合も「ヘア」と示した。

*それぞれの本における語ごとの用例総数と、先の①～④
の場合別の用例数を付した。

*②の場合の例があるものは、備考欄に▽を付して対応す
る語を掲げた。たとえば史料本のクルクルト二例の二つ
ともに足利本系ではクルリクルリトが対応する。

*用例の所在はそれぞれの影印の頁数で示した。

語 形	型	主な下接語	足 史	総 数	場合別数 ①②③④	備考 用 例 所 在 (足利系は足／松の順。＊印は欠巻)
イエツト	ABツト	叫ぶ	シ	1	---1	225
イキイキト	ABABト	為る	ア	1	-1--	▽スズスズト 114/170
ウソウソト	ABABト	空く	シ	1	---1	565
カツシト	AツBト	当る	シ	1	-1--	▽ツツ 597
カツチト	AツBト	食ふ、組みとむ	シ	2	---2	46,262
カツハト	AツBト	覚む	シ	1	--1-	671
カバツト	ABツト	吹く	シ	1	--1-	618
ガハト	ABト	出る、開く	シ	2	11--	▽放ト 14,315
ガハト	ABト	踏出す、打捨つ	ア	2	1-1-	66/134,30/97
キカト	ABト	為る、印す他	シ	22	-3811	▽キツカト、キラリット、ツツ 20,42, 42,123,157,261,277,498,498,499, 501,503,526,537,621,621,621,623, 624,640,642,668
キカト	ABト	相対す 露る	ア	2	-1-1	▽チャツチャツト 75/141,114/170
キツカト	AツBト	露る、有る他	シ	7	--25	16,177,240,255,282,282,669
キツカト	AツBト	別な、為る他	ア	8	-143	▽キカト 36/102,41/15,76/142,85/ 150,107/165,114/170,134/185,134/ 185,140/190
キット	Aツト	露る、為る	シ	2	---2	277,630
キツハト	AツBト	為る	シ	1	--1-	509
キラリト	ABリト	為る見る他	シ	10	--55	3,34,40,128,136,166,277,385,446,618
キラリト	ABリト	為る	ア	1	--1-	190/66
キラリット	ABリット	為る	ア	1	-1--	▽キカト 123/44
キリリト	ABリト	起きかへる	シ	1	1---	290
キリリト	ABリト	寝返うつ	ア	1	1---	27/94
キリリキリリト	ABリABリト	為る	シ	1	-1--	▽クルリクルリト 302
クルクルト	ABABト	巡る	シ	2	-2--	▽クルリクルリト(2) 226,226
クルリト	ABリト	回る、取置く	シ	2	-11-	▽クルリクルリヨ 259,277
クルリクルリト	ABリABリト	巡る、為る	シ	3	1-11	16,157,516
クルリクルリト	ABリABリト	巡る、回る	ア	5	14--	▽クルクルト(2) クルリト、キリリキ リリト */7,7/77,7/77,16/85,62/130
cf クルリダソ			ア	1	-1--	▽クルルトピラ 166/212
クワツト	ABツト	出る	シ	6	--42	149,220,221,228,461,582
サアアツト	ABBツト	音信る	シ	1	-1--	▽チャウト 525
ザツト	Aツト	降る、晴る他	シ	3	2-1-	12,14,16
ザツト	Aツト	降る、晴る他	ア	4	2-2-	*/6,*/7,*/15,114/170
サバサバスズスズト	ABABCD CDト	為る	ア	1	-1--	▽スズスズト 114/170
サワサワト	ABABト	為る	シ	1	--1-	568

語 形	型	主な下接語	足 ／ 史	総 数	場合別数 ①②③④	備考 用 例 所 在 (足利系は足／松の順。＊印は欠巻)
シカト	ABト	居る、治む他	シ	5	3-1-1	282,408,611,612,615
シカト	ABト	断続す、静る他	ア	16	3-3-4-6	▽チャウト、チャト、ツウント ＊/11, ＊/61,27/94,31/98,38/109,39/109,63 /131,64/132,64/132,68/136,97/161, 134/185,134/185,135/186,149/197, 166/212
シツカト	AツBト	静る、坐す	シ	4	---2-2	26,273,318,426
シツカシツカト	AツBAツBト	読む	シ	1	----1	537
スイツト	ABツト	星透る	シ	1	----1	206
ズキト	ABト	尽す、焼く他	ア	4	-3-1-	▽ズツト(3) ＊/12,＊/16,18/86,146/ 195
ズズズト	ABABト	為る	シ	2	-2---	▽イキイキト、サバサバズズズト 547,547
ズズツト	AAツト	見る	ア	1	---1-	10/80
スツカト	AツBト	当る	シ	1	---1-	597
スツキト	AツBト	散る、落尽す他	シ	3	-1-1-1	▽ハラリト 43,564,586
ズツキト	AツBト	絶る、見る	ア	2	-1-1-	▽スツト 10/80,157/204
ズツト	Aツト	出る、尽る、 極る他	シ	21	1-5-13-2	▽ズキト(3) ズツキト、バツト 16,31,33,43,116,151,258,258,261, 286,287,320,332,391,409,493,560, 591,651,677,677
ズツト	Aツト	探る	ア	1	1----	＊/16
スルスルト	ABABト	見る	シ	1	---1-	233
ソツソツト	AツAツト	来て立つ	シ	1	----1	469
ソツト	Aツト	為る、音信る	シ	2	---1-1	13,286
タウ(筈)ト	Aウト	塞ぐ	シ	1	-1---	▽チャウト 231
チツチツト	AツAツト	違ふ	シ	1	---1-	266
チツト	Aツト	指す、紛る他	シ	5	-1-1-3	▽ムスト 123,282,320,418,563
チャウド	Aウト	指す、固る、撞 く、静る他	シ	29	7-1-12-9	▽シカト 14,14,34,177,220,220,221, 228,231,255,260,268,277,282,318, 367,385,397,405,405,422,436,443, 535,610,612,616,698,698
チャウド	Aウト	指す、撞く、打 つ、慎む他	ア	10	7-2-1	▽サアアツト、筈ト ＊/42,4/75,4/75,8/79,39/109,107/ 165,111/168,134/185,134/185,166/ 212
チヨウド	Aウト	参る、打つ	シ	2	----2	683,683
チャツクト	AツBト	休む	シ	1	----1	367
チャツチャツト	AツAツト	映る、見る他	シ	5	2-1-1-1	▽キカト 5,173,313,339,627
チャツチャツト	AツAツト	映る、翻す他	ア	4	2-2-	＊/62,＊/68,＊/68,140/190

語 形	型	主な下接語	足 ／ 史	総 数	場合別数 ①②③④	備考 用 例 所 在 (足利系は足／松の順。＊印は欠巻)
チャット	Aツト	兆す、聞ゆ他	シ	4	--- 4	20,173,366,573
チャト	Aト	静まる	シ	1	- 1 - -	▽シカト 388
チヨツキト	AツBト	為る	シ	1	--- 1	367
ツウト	Aウト	入る	シ	1	- - 1 -	611
ツウンツウント	AウンAウント	切る	シ	1	--- 1	153
ツウンド	Aウント	透る、脱ぐ、極 む、遣る他	シ	52	-141721	▽ツント(6) ツツト(6) シカト、フ ツト 42,111,123,125,125,126,128,132, 132,174,200,211,220,236,236,243, 243,252,256,262,263,265,268,268, 268,271,279,279,282,308,327,330, 341,380,384,385,395,404,405,410, 418,418,428,459,461,509,554,582, 621,642,642,677
ツウンバト	AウンBト	有る	シ	1	- - 1 -	135
ツツト	Aツト	柔らかく、高い	シ	2	--- 2	536,693
ツツト	Aツト	脱ぐ、透る、支 ふ、守る他	ア	11	- 9 1 -	▽ツウント(7) カツシト、ギガト、史 料本欠巻箇所に対応するもの一例 */40,*/69,*/72,10/80,22/90,70/138, 83/149,129/181,138/188,144/193, 158/205
ツント	Aント	極む、切る他	シ	5	1 - 3 1	20,21,24,179,219
ツント	Aント	極む、支ふ他	ア	7	1 6 1 -	▽ツウント(6) */60,4/75,4/75,10/ 80,30/98,30/98,46/115,124/170
ツルツルト	ABABト	日出る	シ	1	1 - - -	191
ツルツルト	ABABト	日出る	ア	1	1 - - -	*/66
トウトウト	AウAウト	踏む	シ	1	--- 1	402
トツト	Aツト	極む	シ	1	--- 1	586
ニヨツト	Aツト	指す	シ	1	--- 1	156
ヌツケト	AツBト	焼く	シ	1	--- 1	461
スレスレト	ABABト	暑い	シ	1	--- 1	547
ノトノトト	ABABト	為る	シ	1	1 - - -	659
ノトノトト	ABABト	為る	ア	1	1 - - -	150/198
ハウ(放)ト	Aウト	推開く	ア	1	- 1 - -	*/6
ハタト	ABト	手打つ	シ	1	- - 1 -	121
ハタト	ABト	喝する	ア	1	--- 1	*/8
ハツキト	AツBト	成る	シ	1	- - 1 -	261
バツト	Aツト	散る、開く他	シ	4	1 1 - 2	▽ハラリト 12,12,12,12
バツト	Aツト	出る、折る	ア	2	1 1 - -	▽ズツト */5,*/12
バラリト	ABリト	開く、為る他	シ	3	1 - 1 1	322,328,410
バラリト	ABリト	散る、離散す他	ア	4	1 2 - 1	▽バツト、スツキト */5,*/16,12/82, 68/136
ハレバレト	ABABト	為る	ア	1	- - 1 -	*/66

語 形	型	主な下接語	足 ／ 史	総 数	場合別数 ①②③④	備考 用 例 所 在 (足利系は足／松の順。＊印は欠巻)
ヒカヒカト	ABABト	為る	シ	1	---1	485
ヒツト	Aツト	吹く	シ	1	--1-	17
ヒナヒナト	ABABト	延ぶ	シ	1	--1-	197
ヒヨツト	Aツト	出る	シ	1	--1-	610
フカフカト	ABABト	下面す	ア	1	---1	40/109
フツト	Aツト	吹く	シ	1	--1-	501
フツフツト	AツAツト	吹く	シ	1	--1-	501
フツト	Aツト	断す、継ぐ他	ア	3	-1-2	▽ツウント 6/77,157/204,157/204
ホカト	ABト	打ち破る	シ	2	-1-1	▽ホツト 11,166
ホカト	ABト	打ち崩す	ア	1	--1-	5/76
ホツト	Aツト	息つく	シ	1	--1-	384
ホツト	Aツト	打ち破る	ア	1	-1--	▽ホカト ＊/5
ホツホツト	AツAツト	焼ゆ	シ	1	---1	244
ホクト	ABト	落つ	シ	1	---1	46
ホクホクト	ABABト	打つ	シ	1	---1	528
ホソホソト	ABABト	延ぶ	シ	1	--1-	197
ホノホノト	ABABト	開く	シ	1	---1	282
マルマルト	ABABト	為る	シ	1	---1	593
ミルミルト	ABABト	為る	ア	1	史料本欠	158/205
ムスト	ABト	取る、組む	シ	2	--11	130,651
ムスト	ABト	指す	ア	1	-1--	▽チツト ＊/44
ムツタラト	AツBラト	為る	シ	1	---1	336
メツタト	AツBト	をしなる、酔ふ	シ	2	---2	254,514
メツタト	AツBト	汚る	ア	1	---1	＊/58
メツタリメツタリト	AツBリAツBリト	云ふ	シ	2	---2	237,514
モウモウト	ABABト	為る	シ	1	1---	657
モウモウト	ABABト	唇すくむ	ア	1	1---	149/198
ヨツト	Aツト	答ふ	シ	1	---1	503
ワツト	Aツト	切て出る	シ	2	2---	226,227
ワツト	Aツト	呼ぶ	ア	2	2---	7/77,7/77
ヲホヲホト	ABABト	道ふ	シ	1	1---	537
ヲホヲホト	ABABト	為る	ア	1	1---	111/168

(1) 史料本に八十一語形・二百六十九例、足利本系に三十六語形・百六例が見える。両聞書の言語総量は史料本が足利本系(完本たる松ヶ岡本による)の一・六倍程度と見られることを思えば、やはり象徴詞の用例数は史料本が相対に豊かであると言つてよろしい。一つには、周知のとおり、両聞書の文体差——要点略記風の足利本系、講義実況風の史料本といった——が関係するであろう。かつて述べたことだが、「物事が明確に、明快に存在し、またそのように理解される」といった意味内容を表現するのに、史料本はいかにも講演風に「キツカト……」「キラリト……」を多用するのに対し、足利本系は「分明」「歴然」などの漢語を多用したり、あるいは「クモリカカリモナイ」のような言い回しをとるようである。すなわち、この問題は史料本・足利本系両聞書の作成意図の差異に基く面がある。要点さえ理解されればよいのなら、仮にそれが「聴講生」とはいえ一定以上の知的水準を備えた学僧にとってのことであれば余計に、あえて「談論風」の言い回しを取らねばならぬことはない。足利本系の「分明」などはそのような視点で考えられるのではないか。そうすると、足利本系に現われる象徴詞どもは、よほど使い慣れたものであるか、あるいは使う必然性があるものであるか云々といったこともあったかしれぬ。もちろん、コトはそう単純でもあるまいが、それらについては後に再び取りあげる。

また史料本に見える語形の多さは、文体的要因と別に、類似形の豊富さに帰する面がある。たとえば足利本系のガハトに対して史料本にはガハト、ガバツト、カツハトの三語形が見える。そのようなパターンを少しく示せば次のとおり。

〈足利本系〉⇓⇓〈史料本〉

キカト、キツカト	⇓	キカト、キツカト、キツト、キツハト
キリリト、	⇓	キリリト、キリリキリリト、クルリト
クルリクルリト	⇓	クルクルト、クルリクルリト
シカト	⇓	シカト、シツカト、シツカシツカト
チャウト	⇓	チツト、チャウト、チヨウド
チャツチャツト	⇓	チヤツチャツト、チャツト、チャト
ツツト、ツント	⇓	ツツト、ツント、ツウト、ツウンツウント、ツウンバト

(2) 両聞書の象徴詞をそれぞれに型分類すれば足利本系の三十六語形は十二種類の型に、また史料本の八十一語形は十九種類の型に区別される。

(2・1) 足利本系について。

*促音系

・ A ツト……サツト、ズツト、ツツト、バツト、フツト、
 ホツト、ワツト
 ・ A ツ A ツト……チャツチャツト

・ A A ット……スズツト

・ A ッ B ト……キツカト、ズツキト、メツタト

***撥音系**

・ A ント……ツント

***長音系**

・ A ウト……チャウト、(放ト)

***…リ系**

・ A B リト……キラリト、キリリト、バラリト

・ A B リ A B リト……クルリクルリト

***複合型**

・ A B リツト……キラリツト

***その他**

・ A B ト……ガハト、キカト、シカト、ズキト、ハタト、

ホカト、ムスト

・ A B A B ト……イキイキト、ツルツルト、ノトノトト、

フカフカト、ハレバレト、ミルミルト、

モウモウト、ヲホヲホト

・ A B A B C D C D ト……イキイキスズスズト

(2・2) 史料本について。

***促音系**

・ A ット……キツト、ザツト、ズツト、ソツト、チツト、

チャツト、ツツト、トツト、ニヨツト、バツ

ト、ヒツト、ヒヨツト、フツト、ホツト、

ヨツト、ワツト

・ A ッ A ット……ソツソツト、チツチツト、チャツチャツ

ト、フツフツト、ホツホツト

・ A B ット……イエツト、カハツト、クワツト、スイツト

・ A B B ット……サアアツト

・ A ッ B ト……カツシト、カツチト、カツハト、キツカト、

キツハト、シツカト、スツカト、スツキト、

チャツクト、チヨツキト、ヌツケト、ハツ

キト、メツタト

・ A ッ B A ッ B ト……ツシカシツカト

***撥音系**

・ A ント……ツント

***長音系**

・ A ウト……チャウト、チヨウト、ツウト、(節ト)

・ A ウ A ウト……トウトウト

***…リ系**

・ A B リト……キラリト、キリリト、クルリト、バラリト

・ A B リ A B リト……キリリキリリト、クルリクルリト

***複合型**

・ A ウント……ツウント

・ A ウン A ウント……ツウンツウント

・ A ウン B ト……ツウンバト

・ AツBラト……ムツタラト

・ AツBリAツBリト……メツタリメツタリト

*その他

・ Aト……チャト

・ ABト……ガハト、キカト、シカト、ハタト、ホカト、

ホクト、ムスト

・ ABABト……ウソウソト、クルクルト、サワサワト、

スズスズト、スルスルト、ツルツルト、ヌレ

ヌレト、ノトノトト、ヒカヒカト、ヒナヒナ

ト、ホクホクト、ホソホソト、ホノホノト、

マルマルト、モウモウト、ヲホヲホト

(2・3) このような型分類については必ずしも両聞書間

に大差を見ぬが、たとえば史料本中へ*複合型>として分類したツウント、ツウンツウント、ツウンバトなどへ長音+撥音挿入>のパターンは足利本系に見ぬものである。

同じく<複合型>中、足利本系のキラリット、史料本のムツタラト、メツタリメツタリトについて。国金順子氏の調査によるとへ……リ+促音>であるABリット型——イラリット、カラリットの類——は洞門抄物にきわめて特徴的に現われるものらしい。が、へ促音+……リ>のAツBリト型になると、これは関西のものでは普通であるが洞門抄物ではあまり見ない(『勝国和尚再吟』のカッチリト

一例、承応三年版入天眼目抄』のキツカリト一例程度)もののようである。そのあたり、両聞書の成立事情に絡んで注目すべきところではあろう。

(3) 両聞書の対照作業から①④の場合分けをする旨を述べた。聞書の言葉について講者と聞書作者(聴講者)との関わり方如何を問うという観点から有効と思われる手順である。

(3・1) 両聞書の対応する注釈文中に、同一の(清濁不問)の象徴詞が出現する場合がある。それは以下に示す十六語二十七例である。史料本全体では八十一語二百六十九例、足利本系全体でも三十六語百六例を数えることを思えば、これら共通して出現する象徴詞の数は少ない。

また後に詳しく述べるが型の上でも比較的単純のものに限られるもの⁽³⁾である。

・ Aツト……ザツト(14/*/6)(16/*/7)ズツト(43/*/16)

バツト(12/*/5)ワツト(226/7/77)(227/7/77)

・ AツAツト……チャツチャツト(179/*/62)(627/140/

190)

・ Aウト……チャウト(220/4/75)(220/4/75)(405/39/109)

(535/111/168)(610/134/185)(612/134/185)

(698/166/212)

・ Aント……シント(219/4/75)

・ A B ト……ガハト(315/66/134)シカト(611/134/185)

(612/134/185)(615/135/186)

・ A B A B ト……ツルツルト(191/*/66)ノトノトト(659/

150/198)モウモウト(657/149/198)ヲホヲホト

(537/111/168)

・ A B リト……キリリト(290/27/94)バラリト(322/68/

136)

・ A B リ A B リト……クルリクルリト(16/*/7)

(3・2) 両聞書の対応する注釈文中に、別個の象徴詞が出現する場合がある。実はその場合にも二種類の対応の仕方があって、形式的に近似の象徴詞同士が対応している場合と、意味的に近似であっても見た目は随分と違うもの同士が対応している場合とがそれである。

(3・2・1) 形式的に近似の象徴詞同士が対応しているというのは次のような十五の組合わせである。

▲一印ハ印空明月清風カキツト印シタゾ(史625)

▲一印明月清風ガキツカト印シタゾ(足139松190)

▽白日ノクルクルト巡ルニキレメハアルマチヒソへ中略

須弥ノ四州ヲクルクルト巡ルニキレメハチトモアルマチヒソ(史226)

▽白日モ必須阿弥陀ヲクルリクルリト巡ハ極モナイソへ中略
略>如此昼夜クルリクルリ(メグツタゾ)(足7、但、末

部欠、松77で補完)

▲貧ヲツウント極メタゾ(史428)

▲貧シテヨリ以来ツント極清虚(足46松115)

この類例を簡略に示す。(史料本ー足利本系の順)

▲キリリキリリトークルリクルリト(302/62/130)

▲クルリトークルリクルリヨ(259/16/85)

▲スズスズトーサバサバスズスズト(547/114/170)

▲ズットーズキト(31/*/12)(261/18/86)(651/146/195)

▲ツウントーツツト(111/*/40)(200/*/69)(275/22/90)

(327/70/138)(461/83/149)(642/144/193)

▲ツウントーツント(174/*/60)(220/4/75)(236/10/80)

(385/30/98)(554/124/170)

▲ホカトーホット(11/*/5)

これらの例について対応の仕方に関わる規則めいたものは見出しにくい、それにしても講述をめぐって両聞書作者の「聞きなし」の違いのようなものが現われているとすれば面白いものではある。ともあれ、この項目に現われる象徴詞の形式はAント型、Aツト型、A B ト型、A B リト型など、先に示した(3・1)の場合に準ずる、比較的単純なものといつてよい。

(3・2・2) 意味的に近似であっても形式上で類似性が稀薄である象徴詞同士が対応している場合というのは次のような十五の組合わせをいう。

▲ハウグワン殿ノサカロノ論ナントヲ聞クトキハ今モ意ガスズズトスルソ (史548)

▲判官殿ノサカ櫓ノ問答ヲ聞ハ今モ意カイキキトスルゾ (松170足114 一部に乱れ)

▽ハツト散スレハト云テ以一指指空中 (史12)

▽ハラリト散スレハ天童指路親以一指指 (足欠、松5)

この類例を簡略に示す。(史料本—足利本系の順)

▲カツシト—ツツ (ト) (597/129/181)

▲カハト—放ト (14/*/6)

▲キカト—ツツ (ト) (621/138/188)

▲キカト—キラリツト (123/*/44)

▲サアアツト—チャウト (525/107/165)

▲チャウト—シカト (405/38/109)

▲チャト—シカト (388/31/98)

▲ツウント—シカト (308/64/132)

▲ツウンド—フツト (677/157/204)

▲スツキト—ハラリト (43/*/16)

▲スツト—バツト (33/*/12)

▲チツト—ムスト (123/*/44)

▲筈ト—チャウト (231/8/79)

このような対応は、聞書が講述に基づくとはいいながらも整理等を経ているのであれば当然のことであろうが、それにしても、史料本作者・足利本系作者のどちらが操作したのか、あるいはまた両方ともに操作したのか、そのあたりの判断はなかなか困難である。とはいえ、先に示した(3・1)や(3・2・1)に見られる象徴詞を比較的講述に近いものとするならば、それらを省いていった残り、すなわち史料本のカツシト、サアアツト、チャト、スツキト、チツト、筈ト等、足利本系のツツ(ト)、キラリツト、放ト、ムスト、フツト等は、それぞれの聞書作者が講述とは別に採った表現であるとも考えられる。そして、その中には(3・1)や(3・2・1)のものと比較的すると、やや複雑な形式であるAツBト型、A B Bツト型、A B リツト型、〈漢字〉ト型などが見出されて注目される。

(3・3) 両聞書間に対応する注釈文が存在しながらも、対応すべき象徴詞がいずれか一方にしか含まれぬといった場合がある。その場合もまた現われぬ側が講述の表現から象徴詞を削ったのか、逆に現われる側が講述とは別にその象徴詞を加味したのか、そのあたり即断しがたいところである。

(3・3・1) 史料本にあって足利本系の該当箇所に見え

ぬものは以下に示す三十五語形九十四例である。

(a) キカト、キツカト、クルリト、クルリクルリト、ザツト、シカト、ズツト、チャウド、チャツチャツト、ツウンド、ツント、バラリト、キツト

(b) カツハト、カハツト、キツハト、キラリト、クワツト、サワサワト、シツカト、スツカト、スツキト、スルスルト、ソツト、チツチツト、チツト、ツウト、ツウンバト、ハタト、ハツキト、ヒツト、ヒナヒナト、ヒヨツト、フツト、フツフツト、ホソホソト、ムスト

先の(3・2・2)と同様に、ここに示した(a)群は(3・1)(3・2・1)に示した象徴詞と重複するもの、(b)群はそうでないものである。すなわち全てでないにせよ、(b)群には講述との関わりが比較的稀薄なものが含まれるであろう。その中にはやはりAツBト型、ABツト型、AウンB型など(3・1)(3・2・1)に見るものと比較してやや複雑な形式のものが存在する。

(3・3・2) 同様に足利本系にあって史料本の該当箇所に見えぬものは以下の十三語形二十一例である。

(a) ガハト、キツカト、ザツト、シカト、ズキト、チャツチャツト、ツント、ホカト

(b) キラリト、ズズツト、スツキト、ツツト、ハレバレト

史料本の場合に比してはつきりと数が減るが、(b)群の中には講述に近いと思われる象徴詞群の中に見出しにくい形式、AAツトのようなものが含まれてはいる。

(3・4) 両聞書間で注釈の文脈自体に相違があつて、結果、その中に含まれる象徴詞に有無が生じたような場合がある。ここに見える象徴詞は、講述よりもむしろ聞書作者の関与が濃厚なものではないか。

(3・4・1) 史料本に見えるものは次の四十七語形八十六例である。

▲イエツト▲ウソウソト▲カツチト(二例)▲キカト▲キツカト▲キツト▲キラリト▲クルリクルリト▲クワツト(二例)▲シカト▲シツカト(二例)▲シツカシツカト▲スイツト▲スツキト▲ズツト(二例)▲ソツソツト▲ソツト▲チツト(三例)▲チャウト(九例)▲チヨウド(二例)▲チャツクト▲チャツチャツト▲チャツト(四例)▲チヨツキト▲ツウンツウント▲ツウント(二十一例)▲ツツト(二例)▲ツント▲トウトウト▲トツト▲ニヨツト▲ヌツケト▲ヌレヌレト▲バツト(二例)▲バラリト▲ヒカヒカト▲ホカト▲ホツホツト▲ホクト▲ホクホクト▲ホノホノト▲マルマルト▲ムスト▲ムツタラト▲メツタト▲メツタリメツタリト▲ヨツト

この中にもABツト型(イエツト、クワツト、ニヨツト)、

AツBト型(カツチト、シツカト、スツキト、チャツクト、チヨツキト、ヌツケト、メツタト)、AツB AツBト型(シツカシツカト)、AウンAウント型(ツウンツウント)、AツBラト型(ムツタラト)、AツBリAツBリト型(メツタリメツタリト)などといった、先の(3・1)(3・2・1)に示したものに比して、やや複雑な形式の象徴詞が見出される。

(3・4・2) 足利本系にのみ存するものは以下の九語形十七例である。

▲キカト ▲キツカト (三例) ▲シカト (六例) ▲チャウド
▲ハタト ▲バラリト ▲フカフカト ▲フツト (二例) ▲メツ
タト

まず用例数が史料本の場合と大差あるが、これは足利本系が要点略記風の文体であることと関連しよう。逆に云えば、史料本が同内容を様々な言い換えや例え話を混じえつつ念入りに述べているということであって、そのような文脈の反復の有無が数の多少に関わったということである。それにしても、先の(3・3・2)と似たようなもので、この中には形式的にもさほど注目すべき象徴詞がない。そのこと自体が足利本系聞書作者の作成態度を反映するものなのかもしれぬ。

以上に列挙してきたことをまとめると次の通り。

▲両聞書に対応する注釈文脈中に、同一の象徴詞が現れること——それらは講述により深く関わっていると目されるが——は少ない。

▲両聞書に対応する注釈文脈中に、類似の形式を持った象徴詞が現われること——それらもまた前項に準じて考えられる——もさして多くない。

▲したがって、両聞書に現れる象徴詞の中で川僧講述の表現をそのままの形で採り込んだようなものはむしろ少数であると見られる。

▲また採り込まれた象徴詞は、象徴詞全体の中では比較的単純な形式のものが多い。

▲比較的複雑な形式を持つ象徴詞——それこそが抄物を読んでいる目をひく面白い表現なのであるが——は、聞書作者が講述によりつつも自ら聞書として整理・作成していくなかで採られた表現である蓋然性が高いと考えられる。

以上、川僧講『人天眼目抄』の二種聞書中に見られる象徴詞をめぐっての愚考を、「覚書」としてひとまずまとめおく次第である。諸賢のご批評を頂戴すれば幸甚である。

注(1) 国金順子氏「抄物の象徴詞」(学習院大学国語国文学会

(2) 拙稿「川僧講人天眼目抄の成立事情と言葉」(筑紫語学
研究一 一九九〇・一二)

(3) 用例の所在は、史料本／足利本／松ヶ岡本の順に、それ
ぞれの影印頁数で示す。

『抄物大系 人天眼目抄』(勉誠社 中田祝夫 一九七五)

『松ヶ岡文庫所蔵禅箱抄物集 人天眼目抄』(岩波書店

古田紹欽 一九七六)